

時代の大きな変化にともなって

2013年7月 片山喜章

その昔、「良くない事」をした幼少児をガツンと叱ると、その場で素直に反省し、時間が経てば、また「同じような事」をして、またまた叱られて反省する。そのくりかえしの中で、多くの子どもが成長してきました。大人たちも躊躇なく、時にはピンタをあげて、子どもを叱り飛ばしたものでした。体罰がこれだけ社会問題化しても「体罰は、ケースバイケースで必ずしも悪ではない」と思っている人は結構いるとは思いますが、もちろん、体罰は容認できませんが、今の子どもにふさわしい“叱り方”や“諭し方”が、わかりづらくなってきた、と社会全体が感じ始めた昨今です。いま、あちこちの地域で、家庭での教育や躾のあり方が話題になり、園の保育もしっかり、じっくりと見直していきたいと考えています。

そんな折、6月半ば、教育委員会から神戸市私立保育園連盟に“しつけ保育”の実践例を発題してほしいと依頼がありました。「しつけの基盤は、家庭にあり、子どもの問題というよりも“大人の背中”の問題」なので、理事会としては、この依頼自体に違和感を覚えつつも保育に「茶道」を取り入れて、“しつけ”に一役かっていると思われる園を推薦しました。

しかし、このような“しつけ”をテーマにした検討会が催され、保育園連盟にも依頼があるということは、教育現場で何が問題になっているのか、容易に押し量ることができます。

いま、「良くない事」や「荒れた言動」に対して、くりかえし言って聞かせても、効き目がなかったり、素直に納得できない子どもが増えています。一方で、幼少期は、“おりこうさん”に振る舞っていた子どもが学童後期になって、陰湿ないじめをする当事者になったり、時には、とんでもない事件を起こしたり、つまり、年月を経て“反発行動”に転じたり、異なる姿に豹変するケースがあります。小中学校の関係者との懇談会でも、そんな事が話題に上がります。先日、在園中、気になっていた子どものその後の様子を学校の先生に尋ねる機会がありました（楽しくやっていることがわかりました）。「保幼小連携」を形式的なものにしないで、壁を打ち破って、ひとりの子どもの見方やかかわり方について、保育者と学校の先生がいっしょに検討する機会を増やし、それが日常の姿になるように私は、提案しています。

いまのこの現状を『社会全体が急速にIT化し、利便性が飛躍的に向上すると“人間”は、とりわけ強い影響力を受ける若者や幼少児は、生物的に変容（電脳化への適応）し始めた』と、真面目に本気で捉えています。つまり、人類が、ホモサピエンスとは異なる生物に進化する兆しではないかと、大袈裟ではなく、そう感じています。

今後、日本型の“しつけ教育”や“マナー教育”は徐々に機能しなくなり、新たな手法を創出しないと、この先 20 年も経たないうちに、非適応の子どもや若者や大人も増えて、社会全体に大きな問題を投げかけると危惧しています。すでに米国では、教育ではなくて薬物投与によって自己抑制を促すケースが見られ、やがて、日本も、そうなるかもしれません。

3歳の子でもスマホを巧みに扱う姿が世間一般に見られます。「子供って、スゴイね!」と感心する話ではありません。若者を含めて数多くの子どもたちは、TVのバラエティ番組に生きる価値観が翻弄され、刺激の強いアニメや戦いものの影響を受け、多種多彩なゲームソフトに興じて「電腦世界」と「現実社会」の双方に存在する「自分」を持っています。

そんな変わり果てた日常生活の中で、脈々と続いてきた封建的風土や未だに残る上意下達の文化は、古き良き日本の伝統もろとも壊れだし、それは、「人権尊重」や「民主主義の発展」に向かわざるをえないと予測しています。民主主義の発展とは聞こえはよいですが、その過程において、必ずと言ってよいほど不快感や苦痛を伴います。シャイで臆病で、閉鎖的傾向の強い日本人にとって、異質な価値観を受け入れたり、異質なタイプの人々の生き方を認めながら共に生きることは、決して得手ではないと思います。下記の例をどう思いますか。

私が属している全国規模の研究会では、毎年、ドイツのミュンヘンの保育園や小学校を見学します。毎年、同じところに行くことで変化がわかるからです。2年前から、小学1年生の教室にソファを置く学校がありました。じっと座ってられない子のために設置したのです。寝そべる方が、先生の話聞きやすい子が、特に男の子の中に居る（脳科学の裏付けが有ると言います）からと、淡々と答えます。私には、受け入れがたい姿であり、学校の対応です。が、他者に迷惑をかけないのに、どうして私たちは受け入れがたいのでしょうか。

お行儀の良い姿勢が、良い学びに繋がるという信仰があります。基本的なマナーとして、お行儀の良さを身に着けるべきという考え方が、学習の成果より強いのかもかもしれません。

今、園全体のテーマは、子どもたちに「一体感」を体験してもらうことです。毎日、たくさん「合唱」する習慣も大事です。これからはじまる「プール活動」、「運動会」や「発表会」など、園もクラスも一丸となれる「協同的活動」をうまく展開して、保育者と子ども、子どもどうしの関係性を深める事、それが、様々なトラブルを解消する良薬だと考えています。

一方で、ひとりずつ異なるその子固有の“心の色”や“小さな胸に宿る痛み”にフィットした愛情表現の方法（叱咤、激励。見守り、導き）を探り出して寄り添う事。この“両輪の取り組み”にチャレンジ！ と、職員一同、一体感を持って挑みだしているところです。